東アジア学術交流史としての漢文訓読

小助川　貞　次

1．はじめに

漢文訓読は日本独自のものではなく，中国はもとより，漢字文化が及んだ中国周辺諸国の中で,それぞれの言語によって行われていた言語活動である。現代のように高度に発達した交通・情報ネットワークを持たない当時にあって，訓読という共通の方法で中国文化（漢字文化）を受容していたことは，文化・言語のグローバル化という点で非常に興味深い。

現代のグローバリゼーションを「文化的覇権国家アメリカへの文化的収斂」[1] と理解するならば，この漢文訓読という方法は，時代と範囲は異なるとしても，東アジア版グローバリゼーションの中で発生した世界標準化システム（現代の通信規格や通貨の統一，関税の撤廃，規制緩和などと類似）と捉えることができる。西嶋定生は東アジア世界を構成する指標として，漢字文化，儒教，律令制，仏教の四つを掲げ，他の三つを支えるものとして漢字文化に高い価値を付与したが[2]，この漢字文化を受容する具体的な仕組みとして漢文訓読が共通に存在したことは，東アジア世界を理解する上でもう一つの重要な指標となる。

現代のグローバリゼーションがアングロ・サクソン的価値体系であることを考えるならば，巷に氾濫する英会話教室や，学習指導要領の改訂によって小学校段階から英語を課そうとする政策は，我々を言語の面からグローバル化しようとすることに他ならない。東アジア（もう少し拡大してアジア全域）は，完全にグローバル化されてしまうのか，それともアジア的価値観を取り戻し，グローバル化と対峙しながら独自の文化を再構築するのか。その場合，中心になるのは漢字文化を生み出した中国なのか，それとも周辺諸国である韓国，日本なのか，或は遠く離れたインドなのか。さらにイスラム圏はこれにどう関わってくるのか，筆者の関心は尽きない。

本稿は，このような関心を世界認識の根底に置きながら，漢文訓読とはどのような現象なのか，またその研究をグローバルに推進するためにはどのようなことが問題になるのか，これまでの成果をもとに具体的に述べる。

2．漢文訓読は東アジア漢字文化圏に共通する現象

漢文訓読が観察できる言語は，その具体的資料の性格によって三種類に分けられる。

〇訓点資料が現存する言語

・日本語訓点資料：８世紀末以降（奈良朝写経の角筆に拠れば８世紀中期）
・朝鮮語訓点資料：９世紀以降（判比量論の角筆に拠れば８世紀中期）
・中国語訓点資料：７世紀中期～８世紀後期（781年吐蕃期以前）（以下，敦煌加点本）
・ベトナム語訓点資料：近世以降[3)]

〇訓読語（語法）が文献の中に現存する言語

・ウイグル語：元朝時代のウイグル語文中の訓読語
・ベトナム語：李王朝期碑文に見える字喃（1210年），李王朝・陳王朝（11 ～ 14世紀）に成立した漢文説話集「嶺南摭怪」

〇記録資料に見える言語

・高昌国（北史高昌伝）：文字亦同華夏兼用胡書有毛詩論語孝経置学官弟子以相授雖習読之而皆為胡語（７世紀初め頃の高昌国で漢文訓読が行われていたことを示す記述）
・新羅（三国史記46，三国遺事4）：薛聡…聡性明鋭生知道待以方言読九経訓導後生至今学者宗之（７世紀後半～８世紀初期の新羅の学者薛綜が，朝鮮語による漢文訓読を行ったと理解される記述）[4)]

これら三種類の内，漢文訓読の現象が最もよく観察できるのは，具体的な資料が現存する日本語，朝鮮語，中国語の場合であり，さらにそれぞれの訓点資料には二つの共通点がある。

・原漢文に対する加点：漢文本文に対してそれぞれの言語を表す符号を直接書き加える
・訓点の類似性：それぞれの符号（訓点）には形態上，機能上の類似性が見られる

原漢文に対する加点は原漢文に強く依存する方法である。漢文訓読という方法は原文から独立して存在する翻訳，あるいは複数言語を併記する対訳（例えばロゼッタ・ストーン）とは根本的に異なっている[5)]。それでは仏典や漢籍を受容する際に，なぜ翻訳という方法を採用しなかったのか。この点に関しては未解明の部分もあるが，おおよそ次のような理由が考えられる。

第一に，中国文化（漢字文化）が到来した当時，周辺諸国では自言語を表記する文字体系が存在せず，外国文化としてそのまま受容するしかなかった。これは最大の理由であるが，この理由だけでは自言語が表記できるようになった以降も漢文訓読を行い続けたことを説明できない。第二に，漢籍を所管するのは律令制度のもとで運営されていた大学寮であり，教科やテキストの種類だけではなく，学習方法，履修方法，試験方法に至るまで細かく規定されていた。

テキストを離れた翻訳が入り込む余地などなかったのではないか。また仏典の場合も大蔵経というテキスト群が体系的に確立されており，漢籍の場合と同様にそのまま受容するしかなかったのではないか。第三に，中国語は文法的関係が語順で示される孤立語であるのに対して，日本語や朝鮮語は形態素を付着させる膠着語である。原漢文を離れて翻訳すると付加要素は当然多くなる。それよりも原漢文をそのまま残しながら，原漢文にはない要素だけを付加させる方がはるかに効率的だったのではないか（図１）。つまり，訓読は「孤立語 → 膠着語」という方向だったからこそ発生・展開した現象であり，その逆では起こらなかったのではないか[6]。

訓点の類似性についてはどうか。それぞれの訓点資料を詳細に観察すると，個別言語・自言語を超越する符号（レベルＡ）と，個別言語・自言語に強く寄りかかる符号（レベルＢ）がある。さらに加点以前にテキストの入手やテキストを読むための学習環境の整備（対校本・音義・辞書・注釈書等）という段階（レベル０）も想定しなければならない。実際の訓読・加点のプロセスはこのようなレベル０からレベルＢへと展開していたことが予想される（図２）[7]。

図１　言語類型と訓読加点との関係

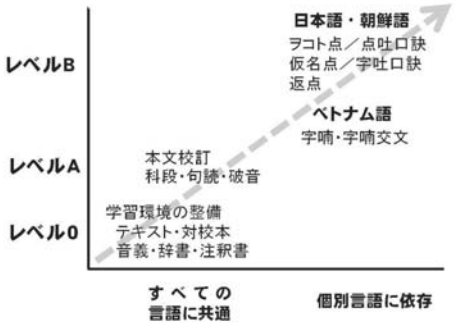

図２　訓点の類似性と訓読加点のプロセス

見方を変えれば，レベルＡは外国語としての基礎的共通的な学習段階，レベルＢは個別言語による発展的学習段階と考えることができる。ベトナム語訓点資料では，字喃がレベルＢに該当するが，ヲコト点や点吐口訣，返点に該当する符号は発見できない。これはベトナム語が中国語と同じ孤立語であって語順もよく似ていることとが要因と考えられる。

訓点の類似性に関しては，そもそも漢文訓読の原初形態がどのようなものであったか，また訓読・訓点は各言語が互いに関係なく独自に発生したものなのか，それともどこかに発生の起源があるのか，ということが問題となる。この点に関しては扱う資料が仏典であるか漢籍であるかという違いが大きく影響している。すなわち仏典の場合は「中国 → 朝鮮半島 → 日本」という考え方でほぼ一致しているが，漢籍の場合はこれとは別に「中国 → 日本」という直接的な影響関係も考えられるし，さらに複線的な考え方も必要であろう（図３）。

このことは，漢文の内容が仏典，漢籍，国書のいずれであっても，また使用する言語がいず

れであっても，漢文訓読とは結局，古典的テキストに対する理解言語・解釈言語であるということを考えれば理解しやすい。

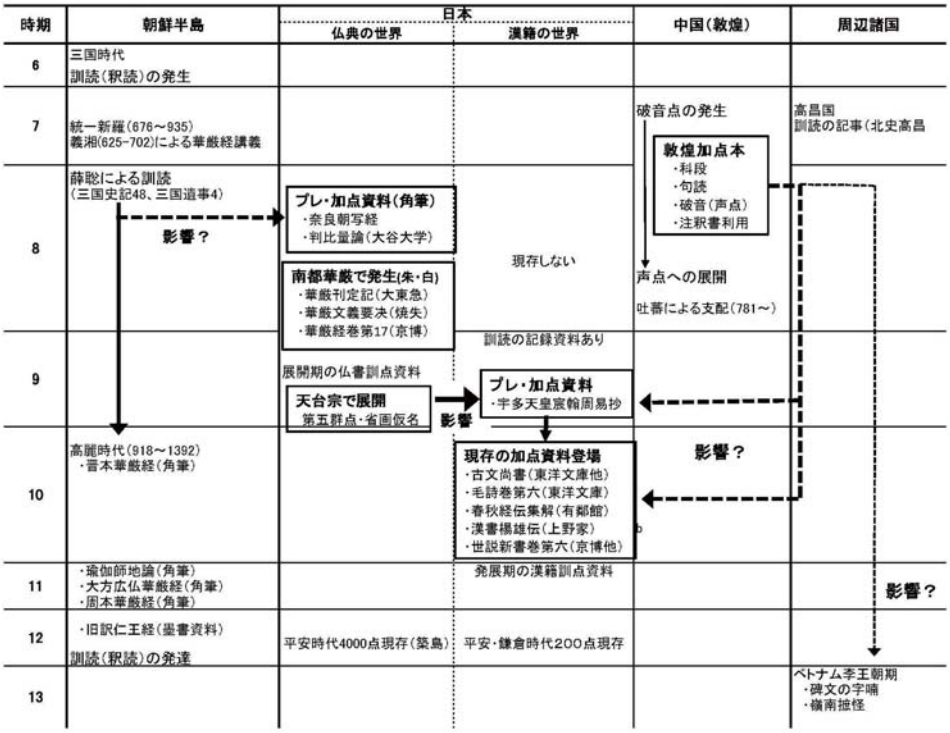

図３　訓読の起源と展開（推定図）

３．漢文訓読と学問史的環境との関係

漢文資料の背景に学問史的環境があることは容易に想像でき，実際の訓読加点の現象についても学問史的環境から説明できる。ただ，漢文資料の内容が仏書であるか漢籍であるかによって，さらにどの言語による訓点資料であるかによっても様相はかなり異なる。ここでは比較的理解しやすい日本語による漢籍訓点資料を取り上げる。

○唐鈔本古文尚書[8)]

本資料は東洋文庫蔵岩崎本，東山御文庫蔵九条本，東京国立博物館蔵神田本（以上は僚巻）から構成され，初唐時代書写の本文に10世紀初頭の訓点が加えられている。古文尚書の経本文が

本行に，孔安国の伝文（注釈）が割注として存在する注釈書付テキストである。

（ア）経本文の訓読に孔安国注（割注）の内容が反映

淮沂其乂蒙羽其藝《二水已治二山已可種藝也》（岩崎本18）（《　》は割行，以下同）

「藝」に甲種朱点「（ウ）ヘシ」→ 孔安国注「可種藝也」を利用

盤庚既遷奠厥居乃正厥位《定其所居正郊廟朝社之位也》（岩崎本140）

「奠」に乙種墨点「サタメ」→ 孔安国注「定」を利用

（イ）孔安国注（割注）の訓読に『古文尚書』全体を注釈した『尚書正義』の内容が反映

東南據濟西北距河也（岩崎本３割）

「距」に乙種墨点「イタレリ」→ 尚書正義「距至也」を利用

［正義］傳東南至距河　正義曰此下八州發首言山川者皆謂境界所及也據謂跨之距至也…

（ウ）経文の訓読に『尚書正義』の内容が反映

雷夏既澤灉沮會同《雷夏澤名雍沮二水會同此澤也》（岩崎本４）

「澤」に角筆点・乙種墨点「トナヌ」，甲種朱点「あり」→ 尚書正義「爲澤也」を利用

［正義］傳雷夏至此澤　正義曰洪水之時高原亦水澤不爲澤雷夏既澤高地水盡此復爲澤也

〇唐鈔本漢書楊雄伝[9)]

本資料は上野家に伝えられ，初唐時代書写の本文に天暦２年（948）の訓点が詳細に加えられている。漢書楊雄伝の本文が本行に，唐代顔師古の漢書集解が割注として存在する注釈書付テキストである。さらに上下欄外に，姚察『漢書訓纂』，顧胤『漢書古今集義』などの漢書注が書込まれている。

（エ）左右異同訓が顔師古注（割注）と書込注の内容を反映

豈駕鶩之能捷《應劭曰…晉灼曰捷及也師古曰…》

「捷」の右側に朱点「オヨハむヤ」→ 顔師古注「捷及也」を利用

左側に墨点「マシハラ（ムヤ）」→ 書込注「捷接也」を利用

［書込注］訓如曰捷接也晉云々

（オ）現行の漢和辞典と異なる解釈

超既離乎皇波《應劭曰淑善也言去汾隅從巫山得周楚之美烈也超遠也…》

「超」の左側に墨点「トホウシテ」→ 顔師古注（應劭注）「超遠也」を利用

［現行の漢和辞典］「超」に「すみやか」の意味を立てるが，これはすでに1935年の神田喜一郎の校勘記に「注超遠也各本遠作速」とあるように，現行漢和辞典の拠った通行本テキストが「超速也」とあったためである。

また，反切注・直音注の書込や声点・破音の加点も，経書の場合は陸徳明『経典釈文』，経書以外の場合はそのテキストに関連する注釈書に含まれる音義が利用される[10]。

敦煌加点本では，加点内容は科段，句読，破音が中心で，一部の資料（S.10毛詩鄭箋，P.2540春秋経伝集解，P.2669毛詩鄭箋，P.3729春秋経伝集解）では紙背に音注の書込が見られるが，日本語訓点資料の和訓に当たるような訓義を直接加点するものは見出せず，学問史的背景を直接確認することは難しい。例えば，経書における破音加点には，陸徳明『経典釈文』の利用が考えられるが，実際には常用的な漢字の派生義に関するものが多く，日本語訓点資料とは加点の背景がかなり異なる[11]。

しかし，日本語の漢籍訓点資料と敦煌加点本の同一本文同一箇所でどのように加点されているかという点から見ると，『経典釈文』との関係を離れても極めてよく一致する場合があり，特定のテキストに固有の読書方法・加点方法が使用言語や地域を越えたレベルで存在していたことが強く窺われる[12]。

４．句読点の問題（レベルＡからレベルＢへ）

訓点の類似性については上述したが，これは飽くまでもレベル内部でのものであった。ところが，日本語訓点資料と敦煌加点本を子細に観察すると，レベルを超えて関係があるのではないかと考えられる例が存在する。日本語訓点資料の句読点（レベルＡ）は句点（漢字右下）と読点（漢字下中）とで区別される。ところが，敦煌加点本の内，これまで調査した漢籍を見ると，いずれも句点（右下）は存在するが，読点（下中）は以下の二つの場合に限定され，しかもその数は句点に比べて極端に少ない（図４）。

・人名，地名，国名などの名詞句（固有名詞が多い）を並列する場合
・特定の語句（云，曰）や注釈中の掲出語句を区切る場合

〇S.799 古文尚書（大英図書館蔵） □．□：156箇所　　□・□：8箇所

044：師氏《亞次．旅衆．大夫其位次卿．師氏大夫官．以兵守門》千夫長．百夫長《師帥卒帥》及庸・蜀

045：・差・髣・微・盧・彭・濮・人《八國背蠻夷戎狄．屬文王者國名．差在西蜀叟．髣微在巴蜀．

盧彭在西北．庸濮在

（数字は所在行数，《　》は割行，破音の表記は省略，以下同）

○S.10 毛詩鄭箋（大英図書館蔵）[13]　□．□：674箇所　□・□：15箇所

034：云能來《箋云・曷何也．何時能來望之》百尓君子．不知徳行《箋云尓女也．汝衆君子我不知人之行何如者．可謂爲徳行．而君或有所留．女怨故問此焉》不忮不求．何用不臧

035：《忮害・臧善也．箋云我君子之行．不疾害也．不求備於一人也．其行何用爲不善．而獨遠使之在外．不得來歸也．亦女怨之辭也》●雄雉四章々四句　匏有苦葉・刺衞宣公也．

（●は科段点）

○S.85 春秋経伝集解（大英図書館蔵）　□．□：252箇所　□・□：41箇所

069：《各盡其美義乃終也》救乏・賀善．弔災・祭敬・喪哀・情

070：雖不同．毋絶其愛．親之道．子無失道．何怨

183：傳十七年春．晉荀林父・衞孔達・陳公孫寧・

184：鄭石楚・伐宋．討曰・何故弑君．猶立文

これに対して日本語訓点資料の読点は，現在の読点の用法のように一文中の句を区切る場合が多く，敦煌加点本のような特定の用法は見られない。

○世説新書巻第六（京都国立博物館蔵）[14]

□．□：395箇所　□・□：313箇所　□(人名)：169箇所（字画下中，「(人名)」で表記）

100：解職．會稽王・既不能距諸侯之兵遂委罪國寶(人名)・．收付廷尉・賜死也》王大(人名)

101：不平其如此．乃謂緒(人名)曰・汝爲・作此

102：欻々．・曾不慮獄吏之爲貴乎．《史記曰漢

（「・.」「.・」は読点と句点の両方が加点される例）

○春秋経伝集解巻第二（藤井有鄰館蔵）[15]

□．□：243箇所　□・□：46箇所　□,□：170箇所（左下返点，「,」で表記）

099：右矩《曼伯檀伯》祭仲足・爲左矩．原繁高渠

100：彌・以中軍,奉公,爲魚麗之陳．先偏,後

101：伍．々承彌縫《司馬法・車戰廿五乘爲偏．以車,居前．以伍,次之．承偏之隙,而彌縫・闕漏

敦煌加点本をすべて調査したわけではなく，また仏典については未調査なので明確なことは言えない。ただ日本語訓点資料では，世説新書のような紀伝道所管の資料に見られる人名注記が，漢字字画の下中に加点されていることと（古紀伝点の特徴），敦煌加点本に見られる読点「□・□」が，人名，地名，国名などの名詞句（固有名詞）を並列するものであることと，形態上も機能上も全く無関係だとは考えられない気がする。つまり，敦煌加点本における読点が一文中の句を区切る読点と，人名などの固有名詞を表示する符号とに分化して行くのではないか。その延長線上に日本語訓点資料の読点が確立するのではないかと考えられるのである（図５）。

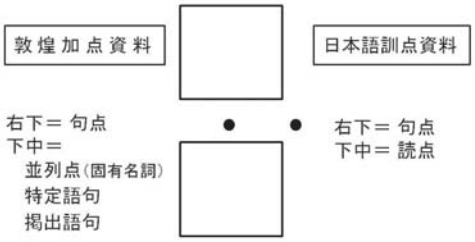

図４　句読点の機能の違い

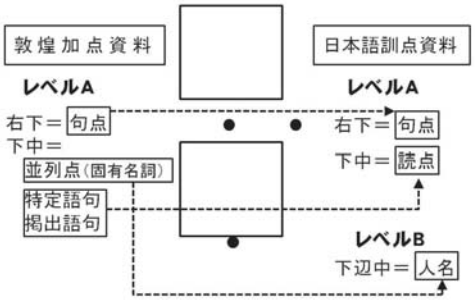

図５　レベルＡからレベルＢへ展開する読点

５．グローバルな漢文訓読研究の推進

漢文訓読研究をグローバルに推進するためには，韓国，中国，欧米の研究者とのネットワーク形成と共同研究，資料を所蔵する機関との協力関係が必要なことは言うまでもなく，これまでも様々な取組が行われ相当の成果が上がっている[16]。しかし，より一層推進するためには，超えなければならないハードルがいくつかあり，とりわけ日本側の研究環境や研究態勢には改善しなければならない問題が多い。最後に，このような点について現在考えていることを述べてまとめとしたい。

○漢文訓読研究に対する社会的認知

漢文訓読の国際的研究と意義については，専門的な事典を除けば一般社会ではほとんど認知されていない。特に高等学校における必履修科目「国語総合」の検定済教科書や日本を代表する国語辞典で全く取り上げられていないという事実は，社会的認知の低さを如実に示している。さらに，この分野に関する日本側の研究状況も低迷しており，韓国側の研究状況と比べて格段の遅れを取っている。早急に研究態勢の立て直しと社会的還元の方策を図る必要がある[17]。

〇漢文訓読資料が持つ構造的問題

このような状況は，実は以下のような漢文訓読資料の構造的性質にも原因がある。

・漢文訓読資料は貴重書（国宝，重文など）であることが圧倒的に多い
・所蔵機関は公的機関（博物館・図書館）以外の特殊文庫・古社寺・個人が多い
・漢文訓読資料は墨書本文に朱・墨・白・角点などが加点された立体的構造物である
・加点は微細かつ複雑であるために認定作業が難しく閲覧環境による影響を受けやすい
・仮名文献のような安価な複製方法では原本を再現することができない

そのため，原資料をイメージできる複製本や教材そのものが非常に少なく，高等教育においても漢文訓読をテーマとする授業はほとんど行われていないのが現状である。実証的な漢文訓読研究にはつねに文化財の壁がつきまとう（国宝，重要文化財に指定された文献の調査が前提となる）。この種の研究の宿命とも言える。ただし，同じような文化財であっても，古典文学研究では上に列挙した問題はほぼクリアされている。平面的な文字資料と立体的な訓点資料の違いというような資料的性質に加え，その時代の学問として何を立てるのかというもっと大きな学問史的な問題があるかもしれない。

〇デジタルアーカイブの有用性と限界

さらにこのような状況は，日本の研究態勢がデジタル化時代に全く対応していないことにも大きな原因がある。現在，国内外では漢文訓読資料を含むデジタルアーカイブがいくつも運用されている。敦煌文献におけるIDP（International Dunhuang Project），国立博物館が所蔵する国宝・重要文化財におけるｅ国宝などは，インターネット上で鮮明なカラー画像を提供しており，漢文訓読研究にとって強力な支援策となるはずである。これらに基づいた研究成果もすでに報告されている。ただし，現状のデジタルアーカイブは，その構築・公開と引き換えに原本保全の目的で実地調査の機会が縮小される傾向にあること，立体的構造物である漢文訓読資料を二次元処理にしていること，書誌情報や画像配置が不完全なものが多いことなど，本格的に利用するには問題が多い。これらの問題を回避するには，デジタルアーカイブが企画される段階で，ユーザの多様なニーズをいかに保証するかということが十分に議論される必要がある。

〇漢文訓読研究のための術語・訳語の統一

上記の三点とも関わることであるが，日本語論文を外国語に翻訳する際に対訳語彙が見つからないものが多く，苦労させられる。例えば，『訓点語辞典』（東京堂出版，2001年）「総論」（石

塚晴通執筆，２頁～４頁）にゴチック体で記された「漢文訓読」「訓読」「加点」「訓点」「点」「訓点資料」「訓点本」「加点本」「句読」「科段」「破音」「朱点」「墨点」「朱鉤」「四声点」「白点」「角点」「勘」「移点」「返点」「省画仮名」「片仮名」「ヲコト点」の内，間違いなく翻訳できるものはいくつあるであろうか。「ヲコト点」ひとつを取っても“Wokoto-ten”が国際的市民権を得ているとは考えがたい。ただし，いくつかの試みはある。例えば Kenneth B. Gardner 編 “Descriptive catalogue of Japanese Books in the British Library printed before 1700”, The British Library, 1993（大英図書館蔵日本古版本目録）には冒頭に用語解説があり，日本古版本に関する術語の英訳が掲載されており，非常に有用である。また日本漢字音に関するものであるが，“Studies in Sino-Japanese”，ACTA ASIATICA 65, The Tōhō Gakkai,1993 とその日本語版『日本漢字音史論輯』（汲古書院，1995年）とを丁寧に対照して行けば対訳術語集になる。ちなみに前著における“Okoto-ten 乎古止点”の説明は，“Points and other marks added to the corners of *kanji* in a Chinese text to facilitate reading.”である。敦煌文献の大半を所蔵するのが英仏の機関であることを考えるならば，漢文訓読研究のための術語・訳語の統一作業を早急に行なう必要がある。

注

1）ロナルド・ドーア（石塚雅彦訳）『働くということ－グローバル化と労働の新しい意味』（中公新書1793，2005年）120頁。

2）西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版会，1983年）399頁。

3）科段，句読，破音の加点資料や原漢文に対して「字喃交り漢文」（ベトナム語訓読文）を割注として挟み込む資料が存在する。さらに近代の資料では，クオック・グー（国語）を漢字本文に直接書き込んだ資料も存在する。ただし，近代以前の資料では，日本語訓点資料や朝鮮語訓点資料のように漢字本文にベトナム語を表わす符号を直接加点した資料は見つかっていない。後述するように言語構造の違いが反映していると考える。

4）南豊鉉「韓国古代口訣の種類とその変遷について」（『訓点語と訓点資料』第118輯, 2007年）によれば，薛聡より一世代前の義湘(625-702)が華厳経を講義した際に，高麗時代の釈読口訣に近いものが使われていたとする（１頁）。

5）日本の抄物，韓国の諺解，ベトナム訓点資料のように原漢文への加点から離れて，訓読した結果をそれぞれの言語で記述する方法も存在する。その場合でも，それらは原漢文とワンセットとして伝承されることが多い。むしろ原漢文から離れているという点で言えば，現代の「訓読文（読み下し文）」形式が該当する。

6）ベトナム語は中国語と同じ孤立語であり，訓点資料の様相も日本語や朝鮮語の場合と異なる（注３参照）。

7）小助川貞次「訓点資料が出来上がるプロセスについて」（『訓点語と訓点資料』第117輯，2006年）。

8）小助川貞次「尚書正義との関係から見た古文尚書平安中期点の問題」（『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』，汲古書院，2005年）。

9）松本光隆『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』（汲古書院，2007）第１章第１節「漢書楊雄伝天暦二年点における訓読の方法」，石塚晴通「上野本漢書楊雄伝の訓注と朱点－古辞書及び現行漢和辞典の記述に及ぶ－」（『訓点語と訓点資料』第88輯，1992年），小助川貞次「上野本漢書楊雄伝訓点の性格－中国

側注釈書との関係－」（『訓点語と訓点資料』第77輯，1987年），同「上野本漢書楊雄伝天暦二年点における典拠の問題について」（『訓点語と訓点資料』記念特輯，1998年）。

10）沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院，1982年）第２部第１章「漢音の学習と伝承」，原卓志「古文尚書平安中期点における朱声点・点発について」（『広島大学文学部紀要』46，1987年），同「毛詩唐風平安中期点における経典釈文の利用－声点・点発を通して－」（『国文学攷』第114号，1987年），小助川貞次「上野本漢書楊雄伝の声点について」（『国語国文研究』第86号，1990年）など。

11）小助川貞次「東アジア漢文訓読資料としての敦煌加点本の意義」（『国語国文研究』第131号，2007年），同「日本語訓点資料における破音の意義」（『口訣研究』第20輯，2008年）。

12）小助川貞次「敦煌加点本を巡る研究課題」（『富山大学人文学部紀要』第49号，2008年）。

13）小助川貞次「敦煌本毛詩鄭箋（S.10）の加点方法について」（科研報告書『大英図書館所蔵朝鮮本及び日本古書の文献学的・語学的研究』（代表：藤本幸夫），2007年）。

14）小助川貞次「資料編（京都国立博物館・東京国立博物館蔵『世説新書巻第六』）」（科研報告書『国際的視点から見た日本語・朝鮮語における漢文訓読に関する実証的研究』（代表：小助川貞次），2007年）。

15）小助川貞次「有鄰館蔵『春秋経伝集解巻第二』釈文及び訓読文」（『訓点語と訓点資料』第120輯, 2008年）。なお，春秋経伝集解巻第二においては，人名を示す符号が存在しないことに加え，句読点の比率が世説新書よりはむしろ敦煌加点本に近い。これは，返読が起こる場合に漢字左下に点発による返点が加点され，結果として読点の機能を果たしていることが原因と考えられるが，敦煌加点本に近い句読点の様相を示していると考えることもできる。

16）筆者が関わったものだけでも下記の国際プログラムと国際共同調査がある。

国際ワークショップ「漢文古版本とその受容（訓読）」（北海道大学，2001年８月）
国際ワークショップ「典籍の国際的交流・受容（訓読）」（北海道大学，2002年10月）
日韓漢字・漢文受容に関する国際学術会議（富山大学，2003年７月）
国際学術会議「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」（北海道大学，2004年９月）
韓中日国際シンポジウム「漢字教育最前線」（富山大学，2004年10月）
国際東方学者会議シンポジウム「漢文の自言語による訓読」（東方学会，2005年５月）
韓国口訣学会国際学術会議（ソウル市立大学校，2005年９月）
国際ワークショップ「典籍交流（訓読）と漢字情報」（北海道大学，2006年８月）
国際ワークショップ「古代韓日の言語と文字」（ソウル大学，2007年７月）
国際シンポジウム「日本漢文の黎明と発達」（二松学舎大学，2007年９月）
国際ワークショップ「古代韓日の言語文化比較研究」（ソウル大学校，2008年２月）
国際学術会議「グローバリゼーションとアジア」（明知大学，2008年９月）
京都国立博物館調査（2005年２月，日本５名，韓国５名）
韓国修徳寺調査（2005年４月，日本１名，韓国３名）
国立公文書館・東京国立博物館・東洋文庫調査（2005年５月，日本３名，韓国６名）
京都大学附属図書館・京都国立博物館調査（2006年１月，日本４名，韓国８名）
大東急記念文庫・東京国立博物館調査（2006年５月，日本５，韓国７）
韓国海印寺調査（2006年８月，日本３，韓国５）
京都国立博物館調査（2007年４月，日本３，韓国２）
大東急記念文庫調査（2007年４月，日本３，韓国２）
京都国立博物館・高山寺・正倉院調査（2008年８月，日本14，英国１，仏国1）

17）小助川貞次「漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について」（『富山大学国語教育』第33号，2008年）。

参考文献（注に記したものは除く）

石塚晴通「楼蘭・敦煌の加点本」（『墨美』201号，1970年）
石塚晴通「敦煌の加点本」（『講座・敦煌』第5巻「敦煌漢文文献」，大東出版社，1992年）
石塚晴通「中国周辺諸民族に於ける漢文の訓読」（『訓点語と訓点資料』第90輯，1993年）
石塚晴通「声点の起源」（築島裕編『日本漢字音史論輯』，汲古書院，1995年）
小助川貞次「東アジア学術交流史としての漢文訓読」（『人文科学研究叢書』7「グローバリゼーションとアジア」，明知大学校人文大学，2009年，付記に述べる発表原稿を収録）
小林芳規「敦煌文献に加点された角筆の符号と注記及び本邦の古訓点との関係」（『訓点語と訓点資料』第100輯，1997年）
小林芳規・西村浩子「韓国遺存の角筆文献調査報告」（『訓点語と訓点資料』第107輯，2001年）
小林芳規「韓国における角筆文献の発見とその意義－日本古訓点との関係」（『朝鮮学報』第182輯, 2002年）
小林芳規『角筆文献研究導論（上・中・下・別）』（汲古書院，2004 ～ 2005年）
小林芳規「日本語訓点表記としての白点・朱点の始原」（『汲古』第53号，2008年）
藤本幸夫「古代朝鮮の言語と文字文化」（『ことばと文字』，中央公論社，1988年）
南豊鉉・李丞宰・尹幸舜「韓国の点吐口訣について」（『訓点語と訓点資料』第107輯，2001年）
南豊鉉「韓国古代口訣の種類とその変遷について」（『訓点語と訓点資料』第118輯，2007年）
庄垣内正弘「ウイグル語における漢文訓読」（国際ワークショップ「漢文古版本とその受容（訓読）」報告書，北海道大学，2001年）
Nguyen Thi OANH「ベトナム漢文訓読について―『嶺南怪』を中心に―」（国際ワークショップ「典籍交流（訓読）と漢字情報」，北海道大学，2006年）

付記・謝辞

本稿は，富山大学教養教育で2004年から2007年まで４期開講した教養原論「言語と文化」，及び富山大学人文学部日本語学特殊講義で2005年から取り上げているテーマ「東アジア学術交流史としての漢文訓読」による成果を踏まえ，韓国明知大学校で開催された国際会議「グローバリゼーションとアジア」（2008年９月５日）及び台湾致理技術学院応用日語系での学術講演（2008年12月11日）における発表原稿をもとに，その後の知見を加えて補訂したものであり，また科研費・基盤研究B（海外学術調査）「国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究」（2007年～ 2009年，代表：小助川貞次）の研究成果の一部でもある。

韓国明知大学校関係各位並びに尹相実先生，崇実大学校呉美寧先生，台湾致理技術学院応用日語系関係者並びに李天軼先生，簡成財先生に多大なる御支援を頂いたことを記し，厚くお礼申し上げる。